

あぶらむ通信

第5号 1989年5月13日 あぶらむの会発行

〒509-41 岐阜県吉城郡国府町宇津江 TEL057772-4219. 3828

飛驒だより

春の訪れを告げる飛驒の春祭り、そしてこの遠い山里にも桜の花が咲きはじめました。待ちに待った春がやってきたのです。今年は暖冬で過ごしやすい冬であったとはいえ、春の訪れにはやはり心がはずむものがあります。あぶらむ通信をお手になさっている皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。

10月中旬より半年間たき続けている薪ストーブ、冬ごもりのこの期間にもあぶらむの会にとって数々の大切な出来事が起こりました。



あぶらむの里に建った建設基地、側には来冬用の薪が集められている。

その最大事は土地取得の完了です。2月18日、フィリピン・キャンプ出発前には是非完了させたいと、最後の土地所有者国府町に残金の支払いを済ませました。

あぶらむの会の土地は国府町と森下藤次郎氏、森下準吉氏三者の所有でした。'87年10月に契約を交わし、同年12月森下藤次郎氏支払い完了、'88年3月森下準吉氏支払い完了、そしてあぶらむの会の募金状況を考慮下さり、国府町は本年の3月まで支払いを待って下さいました。明日が最後の支払いと思うと気持ちが高ぶり、なかなか寝つくことができませんでした。「お持ち帰りは小切手でよろしいでしょうか」、銀行の窓口嬢の優しい声に、「いや現金で」とブスとした声で答えた私。7百万円余の札束とはどれだけの高さになるのか自分の目で確かめたかったのです。カウンターに積まれた札束にご支援下さった皆様方お一人々のおもいを見た時、胸が一杯になりました。本当にありがとうございました。買取総面積17,972.16㎡(5436.92坪)総額21,684,710円でした。はじめてあぶらむの里の土地を目にして丸二年、それが現実のものとして私たちに与えられたのです。夢のよう

です。ここに土地取得完了にあたり改めて心よりお礼申し上げます。ありがとうご

ざいました。

土地代金支払い完了と同時に、整地や作業小屋等の建設に移ります。3月末、その第一歩として道具小屋の建設を行いました。廃材を利用しての6畳一軒家、林の中に建つ姿はまるで物語「大草原の小さな家」のような感じです。物置小屋とはいえ私たちにとってはあぶらむの里での建物第1号、活動の拠点が出来たことの喜びはひとしおです。

昨年12月、飛騨高山食と緑の博覧会で使用された建物の競売会が催されました。木の国飛騨を自称するだけあって使用されている材は仲々立派なものでした。しかし入札など初めてのことで、その上軍資金もなし、おまけにギックリ腰で寝たきり中年の私は気も進まず、せっかくの機会をあきらめていました。大家の野村さんの熱心なすすめで「ダメ元」気分に入札に参加しました。しかし参加するからには一矢むくいたしの気持、お世話になった技能訓練校建築科の平瀬先生に相談し情報を集め、その結果「プロの入札相場は坪当たり8～10千円」との結論に達し、あぶらむの会は少し色をつけ坪11千円で札を入れることにしました。そして解体作業等を考え、手ごろな24坪と12坪の二棟に札を入れたのです。いよいよ結果の発表です。まず24坪の建物四棟分です。「1位落札80万円」、私たちの入札価格は265千円です。その一言でこれはかなわないとあきらめました。「4位あぶらむの会」、私は一瞬キツネにつままれたような気分になりました。確かに「あぶらむの会」という声が聞こえてきたのです。そしておまけに12坪の方も135千円で落札してしまったのです。どちらか一棟当たればと思っていたのに、困ったことに2棟も落札してしまったのです。それも両方とも落札者のうち最低価格で落としているのです。これは神様からのクリスマスプレゼント、二棟とも必要だから買いなさいというお告げと思い、エイッと気合をかけて大まい40万円を支払い二棟の家を入手しました。

年の瀬もおしせまった雪の日々、近所の人々の助けをおかりして二棟の解体を終えました。今年の末ごろには、これらの建物が木工と食品加工の作業小屋としてあぶらむの里によみがえることと思います。

もう一つ嬉しいことは藤本隆君の旅立ちです。昨年4月、中学を卒業した彼は「自分の歩む道を考えるため」、1年間の約束でここへやって来ました。遊びたい盛りどころなのに辛い仕事の毎日でした。炎天下のあぶらむの里での土方仕事、ヘトヘトになった時に二人で口にした小川の水の味を忘れることができません。小休止の時に交わす言葉がはずんでいました。豊かな自然の中で精一杯身体を動かし人と心をかかわす、そんな生活の中でいつしか彼の心の中に将来に向けての何かが生まれていったようです。12月末、「僕、高校へ行きます。受験勉強のため家へ帰らせて下さい」と云った



合格の報を待ち、応援にかけつけてくれた藤本君

彼。「そうか、よかったなァ」と云った私、一緒に苦勞してきた彼と別れることの寂しさ、わずか半年の間に16歳の少年に仲間意識をいだいていた自分に不思議さを憶えました。

その彼が3月末、合格の報をもって訪ねてきました。私が嬉しく思うのは彼の合格の報もさることながら、彼が自分の人生旅路の途上で一時的にはあれ道に迷った時に勇気をもって立ち止まったということ、そしてその立ち止まった彼をあぶらむの会が受け入れることができたということです。

高校—大学—就職—転職なしで定年まで勤めあげる、日本の社会ではこれが立派な人のようです。人生の全てが整然とベルトコンベアーに乗ったように流れて行く。人生や社会の在り方に疑念をもつことや、道に迷うこと、立ち止まることも赦しません。まわり道や他者と異なる生き方をする人間には、異端者か社会的失格者の烙印をおしてしまうような風潮です。多くの方は仲間はずれを恐れ、流れからはずれないように窮々とし、いつしか自分自身を見失い精神的苦痛にあえいでいるように私には映ります。

人間の生きることへの力は道に迷い、道を求める中に日々生まれ、その徹々たる力が蓄積され、いつしか私たちをして人生の良き旅人に育てあげているように思われます。

多くの友が高校へ進学した中で、自分の内的必然性のたかまりを待っていた藤本君の勇気に私は心より拍手を送ります。彼の素敵で笑顔が生まれる過程に、私たちあぶらむの会も参与できたことを嬉しく思います。

さて最後にフィリピン・キャンプの報告です。私たちの学び場であり、聖天使園を通して支援しているサガダ村で、昨年11月不幸な出来事が起こりました。酒に酔った政府軍兵士が銃を乱射し二人の村人を射殺してしまいました。その内の一人は5歳の子供でした。政府軍と新人民軍との武力衝突が続くフィリピン、サガダ村のある山岳州もそんな問題をかかえている地域の一つです。鮮血に染まった無惨な子供の写真を見ながら、友人の画家アスターは平和を祈り求めながら抗議の絵を描いていました。

今年も三菱銀行国際財団の助成により、総員24名で学びの一時を持つことができました。関係者各位には政情不安ということで心配をおかけしました。受け入れ側も私たちの安全を第一に考え、万全の準備をしてくれました。いつもと変わらぬ平和で穏やかな村でしたが、それ故にかかえている問題の深刻さを思うと胸が痛みました。

「私たちの言葉を信じて、よく来てくれましたネ」、深い隔たりをかかえている両者の理解は、信頼に基づいた具体的な行為の積み重ねであることを改めて痛感させられました。

土地取得完了と同時に、あぶらむの会の働きも第二段階に入りました。これからの10年間は建物づくりとプログラム内容の充実です。

10年程前、東京町田にある桜美林大学を訪れた時の、創設者清水安三氏の言葉を忘れることができません。「戦争に負け、裸一貫で引き上げてきた私、日本再生の教育をと心に誓い、土地を与えて下さいとこの



私たちの歓迎と送別に民族ダンスを踊る聖天使園の子供たち

敷地の周囲を毎日祈りながら歩きまわりました。あなたがたは幻を見たことがありますか。／信仰者は幻を見なければだめです」。90歳を越えた氏の言葉に力が満ち溢れていました。信じ、求めるが故に幻を見ること、私たちの見た小さな幻が今一つここに実現しました。今回の土地取得を第一のステップとして、私たちはさらに次の幻を追い求めて行きたいと思っています。

今後とも皆様方のご支援を切にお願い申し上げます。

飛驒はこれから心地よい季節、どうぞ一度お出かけ下さいませ。皆様のおいでとご健康をお祈りいたします。

あぶらむの会 代表 大郷 博

フィリピン・サガダ村聖天使園支援の件、ご報告

88年度は、8教会、1養護施設、31名の個人の方より、総計1,126,753円が寄せられました。心よりお礼申し上げます。

ご協力下さいました方々には直接詳しくご報告を差し上げたく思います。89年度も引き続きご協力いただければ幸いに思います。

あぶらむの会での1年間

藤本 隆

僕はこの一年間で、いろいろなことを体験しました。つらかったこと、楽しかったこと、うれしかったこと、普通に高校へ行っていたらなかなか体験できないことをたくさん体験しました。

はっきり言って、最初の一カ月ぐらいは、早く家に帰りたいと思ったことも結構ありました。そのころは、毎日、毎日、野村のおじいさんと庭を造っていました。朝は、チェンブロックのジャラジャラという音で目がさめて、すぐに下において朝御飯を食べて、御飯を食べている間もチェンブロックの音がなっている。まるでジャラジャラという音が早くしろ早くしろと言っているような気がしました。午前中は、十二時のサイレンが鳴るまで、午後はだいたい五時半ごろまで庭を造っていた。僕は野村さんの言っていることが、飛驒の言葉でよく分からない時がよくありました。野村さんが「コレ、だちかんだちかん」と言いました。僕は、さっぱり分からないので、「この人は何言っているのかな」と思いながらも、「ええ、そうですねえ」と言ったら、そしたら野村さんが白い歯をみせて笑って、ちゃんと説明してくれました。「『だちかん』というのは東京の方では『だめ』とか『いけない』ということと同じだ。」

あと、庭を造ることの中でつらかったのは、一個の石をつむのに、何時間もかかる時があって、こうでもない、ああでもないとかこれは腹がでてるとかでいていないとか、僕はいいかげんに、どうだっていいじゃないかと思った時もありました。

ちょうどこの一ヶ月というのは、先生も外へ行って仕事をしていたし、ほとんど、庭を造る仕事をやっていたから、僕はこの仕事をずっと一年間やるのかなあと思って、本当に家に帰りたくなかった時が、よくありました。

あぶらむのしき地にトラクターを入れて、林の中に何かを造ろうとして、トラクターで林の中にはいっていったらトラクターのタイヤが、どんどんうまってしまって大変な思いをしました。結局、半日つぶれてしまいました。でも、僕はまだトラクターが脱出できた時の感動は忘れていません。チェンブロックを持ってきたり、タイヤの下に石をつめたり木の丸太をつめたりして、トラクターをぬかるみから出そう出そうと思ってやると、トラクターのタイヤはどンドン沈んでいき、最後はつづくさんがブルドーザーで引っぱり出しました。

このしき地にはもう一ついやな思い出があります。それは草かりです。先生がマラソン関係の仕事でいない時に一人でずうっと草かりをしていました。自分の背たけよ

りも、もっと高くのびた草をかかっていて風が吹いて草がゆれるのを見ると、なんとなく草が僕のことをバカにして笑っているような感じに思えたり、ヘビも結構でました。僕はヘビが苦手できらいです。たまに、草刈り機にヘビがあたって、二つに別れて飛んで行くのを見ました。お百姓もやりました。まず石ころとか全部除いて、トラクターで耕して水を入れて、トラクターで平にしたり、どろまみれになって田植えもしました。そして秋には、稲かりをして精米所に持っていったりしました。田植えを実際に自分でやってみた時、はじめて、お百姓さんの苦勞がわかりました。昔は機械なんて何もなかったから、本当に大変だったと思いました。



20kmマラソンを終えて満足の笑顔藤本君

僕は、本当にいろいろなことをやりました。マラソンのばんそうもしたのです。一度目は、間寛平さん、二度目はパトリックさん、三度目は西村さんと下田さん。一度目の間寛平さんの時は、道路が通行止めで別のコースを走って、二度目と三度目は百五十キロのコースです。寛平さんの時、僕はスクーターでずっとばんそうをしました。スクーターで人の走るペースで百二十五キロも走ると、さすがにおしりが痛くなって結構つかれました。でも、走っている人に比べたらなんでもないと思いました。寛平さんはとてもおもしろい人でした。ふだんテレビに出てる人といっしょに一日生活するなんてと思い、最初がドキドキしていたのに、しばらくいっしょにいと、全然ドキドキしなくなりました。

寛平さんと、いっしょに一日走って、寛平さんがゴールした時に本当にすごいなあと思いました。そしていつか僕も、一度はこういうことにチャレンジしてみたいなあと思いました。そして、パトリックのばんそうをした時は、最後のほんの少しをいっしょに走らせてもらいました。そのほんの少しで僕はものすごくつかれたのに、パトリックさんは、その何倍も走ったんだなあと考えたら、これは本当にすごいことだと思いました。今度は西村さんと下田さんのばんそうも手伝わせてもらいました。その時も最後の少しをいっしょに走らせてもらって最後宇津江の坂をずうっと上がって行く途中山びこの所で僕が足を止めて、もうだめだと思って少し歩いていたら下田さんが「隆君どうした、もう少しだガンバレ」とさげんでくれて少し待ってくれて最後までかけ声をかけながら、西村さんと下田さんと僕の三人でゴールしてくれました。この時僕はばんそうを手伝わせてもらっていることを忘れていて、かえって二人のあしでまといになってしまったなあと思いました。でも僕は本当にうれしかったです。

そして、自分もやってみたいなあっと思いました。

先日、自分も走ったと言うとウソになるけど、千葉県市川市から、飛驒国府まで歩くことになり、本当に体験することが出来ました。

家を出る日は、夜の十二時に家を出発する予定でいたんだけど、緊張と不安で、一人じっとしてられずに、友達と遊びに行ってお十時ごろ家に帰って来て、風呂に入って着がえて十二時になるのを待っていて、結局待ちきれずに十一時半に家を出てしまいました。そして朝七時ごろまでずうっとマラソンのペースで走って行き、セブンイレブンで40分ぐらい、御飯を食べたりしてすわりこんでいたら、足が冷えてしまったのかどうかよくわからないけど、歩いていても足がいたくなり、まったく走れなくなりその日は埼玉県の岡部までひたすら歩きました。岡部に着くと、お兄ちゃんが、あたたかいうどんを作ってくれました。そして二日目は岡部から高崎まで歩き、三日目に高崎から軽井沢まで歩きました。この日は本当につらい一日でした。朝七時半ころ目がさめて、起きようと思ったら、足がパンパンにはれてすごく痛くて、起きれません。それでも仕方なく床をはって御飯を食べに食堂まで行きました。民宿のおばさんが心配してくれて「お兄ちゃん、だいじょいぶ。」と声をかけてくれて、ビニール袋に氷を入れて、「これで足を冷やしてガンバッテ行きな」と言ってくれました。僕は、ぜったいに行けるわけないと思っていたけれど、足を冷やしながら、御飯を食べている間に、ほんの少しだけよくなってなんとか歩いていけるという気持ちになりました。そしてなんとか、八時半ごろに出発することができました。

軽井沢に行くには、碓氷峠をこえなければなりません。この碓氷峠というのが、ふだん、バイクで通るとあっという間に、峠をこえてしまうのに、歩いてこえたら、五時間半もかかりました。碓氷峠に入る前にしばらくまよいました。その時ちょうど三時ごろで六時半ごろには軽井沢に着くか、遅くても七時半ごろには着かないと、宿がとれないと思い、碓氷峠に入る前に宿をとるかどうかが考えていました。結局、考えていてもしょうがないと思い、歩くことに決めました。ところが、六時になっても七時になっても八時になっても、軽井沢の町にでることができませんでした。日もくれて本当に真っ暗の中、小さなライトをかた手ににぎり、首からヘッドライトをぶらさげて、フラフラとひたすら峠を登っていきました。途中、小便をしようと思って、背中から荷物を下ろして、小便をしました。小便をしたあとに、ヘッドライトが暗かったので、電池をかえようと思ってしゃがみこんで眠ってしまい、パッと目がさめると、目の前に大きなトラックとその運転手さんがいました。「おい、坊主だいじょうぶか、そんなところで何をしているんだ。」と、たずねてくれて、「だいじょうぶです。」と言うと「どこまで行くんだ、どこからきた。」と聞いてきて「軽井沢までです。」と答

えると「そうか、もう少しだ、ガンバレ」と言って先に行ってしまいました。そして僕が碓氷峠を登りつめた時、とてもうれしかったでした。僕のことをおこしてくれたトラックの運転手さんが、峠を登りつめた所の駐車場で待っていてくれて「おい、だいじょうぶか、軽井沢はすぐそこだガンバレ。」とさげんでくれました。

四日目は、軽井沢から、丸子まで歩き、五日目は、丸子から松本まで、六日目は松本から奈良井まで、七日目は奈良井から、開田高原まで、八日目は開田高原から高根村まで、九日目は高根村から国府までひたすら歩きました。本当につらかった九日間だったけど、今、考えると本当に心に残る九日間だったなあと思います。何度、歩くのをやめて、電車に乗ってしまおうかと考えたことか、でもゴールした時とか、高山の美女峠で先生にあった時とか、本当に電車になんか乗らなくて良かったと思いました。

僕は本当にこの一年間、あぶらむの会に来て、僕のこれからの人生の中で、むだになるようなことは絶対にはないと思います。

時には、ロープのしぼりかたがわからなくておこられた時に、なんでこんなこと覚えなくちゃならないのだろうと思ったこともありましたが、今考えると、こういうこと一つ一つが絶対に必要ななあと思います。

僕は、たまに、「どうせ高校行くのなら、去年行けばよかっただろ」と、まわりの人に言われることがありますけど、決してそんなことはありません。本当に後かいするどころか、本当に一年間いろいろな経験ができて、得した気持ちです。

僕がこういう気持ちになれたのは、先生を初め、毎朝、大声で起こしてくれたり、いつも御飯を作ってくれた育さんや、あぶらむの会のみなさん、国府町のみなさんのお蔭です。本当にありがとうございました。僕は、この一年間にあった出来事を絶対に忘れません。もちろん、沖縄の愛楽園のおじいちゃんやおばあちゃんとお話したこととも決して忘れません。最後に本当にありがとうございました。

バザーへの献品願い

今年も又、夏に3、4回の大バザール開催を予定しております。家庭日用品雑貨の献品をいただければ助かります。ただ残念な事ですが中古衣料はどんなに工夫しても売れませんので、どうぞご容赦下さい。

フィリピン
「比律賓乃黄昏」

ピサオ滞在 飛驒国際工芸学園二年 足立啓徳

ガンノ

「いて〜。」

ゆっくりと瞼を開ける。窓の向こうにライステラスが広がり、道の廻りには大きな岩が並木のように聳えている。止まったノ着いたノ「着いたゾ〜。起きろ〜。降りるゾ〜」車中に木霊する西村さんの声、寝呆け眼でバスを降り、荷物を慌ただしく運ぶ。ほっと一息、「う〜ん。」と背伸びをして深呼吸、サガダの臭いを感じつつ、僕は眼下に広がる景観を覗いた。その刹那“飛驒に似ているノ”直感した。その時すでに僕はここの風土に親しみを感じていた。これがマウンテン=プロヴィンスと僕の出会いであった。

今年の初め、僕が今生活している、飛驒高山から車で約三十分の所にある“あぶらむの会”へお邪魔した時に、我らが^{まなこ}大先生は僕に、フィリピンキャンプ参加をもちかけた。「行きます」と答えたものの、フィリピンキャンプの意義について深く考え始めたのはマニラに着いた夜からだった。今尚、その明確な答えは出ていない。でも、今こうして飛驒の土を踏み生活してみて、モヤモヤとではあるが、感じ始めている。というのは、戻ってみるとエアメールで玄関が埋まっていた。キャンプ中にも交流について話し合いをしたけれど、すべて頭の中での事にすぎない。ここに手紙が来たという事実があり、それを自分が体験したこれからの本当の交流なんだ。

旅を振り返ってみて心に残るのはやはりピサオだ。マニラのスラム“スモーキーマウンテン”も強烈だ。だが、共に生活した弟や妹達のいるあの地には勝らない。ピサオはサガダから車で三十分の所にある村だ。風が強いがサガダよりも暖かいピサオでも、サガダで感じたあの飛驒を思わせる“山の臭い”に触れることができた。紹介された瞬間、その相手が自分の兄妹になる。あの八日間、僕は遠くに住む兄貴であって客ではなかった。最初に「何故ここに来たのか？」と聞かれた。「より良い経験を積むこと。そして沢山沢山良き友を作ること。」僕は答えた。次に日本の事を、「洗濯も掃除も機械がやるのか？日本人はみんな金持ちというのは本当か？ここに来るのにいくらかかった。トイレはきれいか？百姓はいないのか？云々」僕はそれについて、自分の住んだ東京と高山の比較を例に上げ、都会と田舎を比較して説明し、国と国民生活について他の先進諸国と比較していかに物価が高いかを説明した。ちなみに飛驒地区最大の都市高山にさえ、下水道の完備はされておらず、郊外へ出れば厠は母屋の外



民族衣装をつけ仲間と歌を唄う、右端著者

にある。浄化槽か溜池なのだ。彼らは自分達とさほど変わらない生活が日本にもあると言って仰天した。翌日から僕は日本、特に飛驒の話を毎晩遅くまで話さねばならなかった。田畑を見るために山道を歩く僕を見て彼らが言った。「前にこの様な所を歩いた事があるのか？君は他の日本人とは違う。野性的だ。」これを機に一気に距離が縮まり、何でも話せるようになった。

“親しき中にも礼儀有り”僕はどんなに仲良くなっても自分が日本人であることを忘れなかった。彼らの心配りの中に家族愛にも似た愛情を感じ、どうしてもそれに応えなかった。口では「来てくれるだけで充分」と言っているが、彼等もまた僕等の暖かな心使いを期待しているに違いない。僕等の文化に、僕等のセンスに彼等は触れられている。それに応えるのが国際人としてのマナーだと思った。彼らの気持ちを知っていて何もしないのは罪だ。そこで僕等はひな祭りにちらし寿司、肉ジャガならぬネギジャガを作り、又いかの塩辛をご馳走した。食後にはひなあられとひなおこし、そして磯巻きせんべいを披露した。彼等の喜びはたとえ様もなかった。帰る時には僕等の心と、一曲の歌を残してきた。彼等は僕の名ダムガス＝タラーキィを忘れないだろう。僕も彼等を決して忘れはしない。

太陽はすでに西に傾き今にも沈みそうである。このまま二度と昇らぬ太陽にはしたくない。「フィリピンという太陽を思い続け又いつかその輝き^{もと}の下に行きたい。」そう思いつつ改めて旅を振り返ってみた。初めてのアジア、初めて作ったアジアの友達。フィリピンは外国という気がしない。遠い親戚の家に遊びに行くという感じなのだ。これがアジアか、自分達の兄弟という感じなのだ。この感覚を持つというだけで、我々日本人がアジアに対し援助をするだけの理由になると思った。僕らアジア人なのだ。今、日本人は経済進出をアジアにしている。でも現地の人と交わろうとしない。援助にしても、金のためとか、良かれと思って協力してやっていると、札束で相手の顔を叩いている様な姿勢だ。傲慢さを感じる。協力するのが当たり前で、こちらは援助させてもらっているという感じが欲しい。彼等の今の状況を作り出したのは我々先進国の国民なのだ。今、日本は心という部分に於いて非常に危険だ。戦後日本をここまで復興させた事を誇るあまり謙虚さを失ってしまった人々。自分の老後のために自分の都合のいい様に子供達を躱ける人々。そして自分の容姿ばかり気にする若者達。与えられた喜びしか知らない憐れな子供達。心が荒廃している。表面的、物質的面だけ

しか見ることのできない狭い視野。「この状態をなんとか打破し、心豊かな青年を育てるために、このキャンプは存在しているのではないか？」とも思えてくる。僕はフィリピンに行きナイーブな彼等と接することによって感性を磨き、より豊かな感受性、より鋭い感性を、持ちたいと思った。少しだけ効果はあった様に思われる。まだとても充分とはいえないが、思慮が増しやがて僕が社会に羽ばたく時、ここで得られた経験が、感性が、少しでも社会への貢献に役立つことを期待している。

僕は黄昏時の今、鼻を求め、この混沌とした世界を、一人彷徨い歩いている。

後援会事務局だより

日頃、“あぶらむの里建設募金”にご協力いただき誠にありがとうございます。

さて、目標期限の3月末日までに寄せられた募金総額は23,066,885円でした。目標額3,000万円には達することが出来ませんでした。しかし、大郷先生の巻頭「飛驒だより」にもありましたように、2月18日、土地取得代金を総て支払い終えることが出来ました。これもひとえに皆様の暖かいご支援の賜物と、心より感謝いたしております。

土地取得も完了し、いよいよ第二段階、建物の建設に取りかかることとなりますが、今後寄せられる募金は、建物建設のために使わせていただきたいと考えております。

現在、第二段階の募金計画について検討中です。今しばらくは、現在の募金を続けていきたいと考えておりますので、何卒よろしく願いいたします。

(事務局 西田邦昭)

4月16日現在の募金の申し込み総額及び振り込み総額は以下の通りです。

申し込み総額 24,076,860円

振り込み総額 23,125,885円

*送金先 郵便振替 東京7-255427あぶらむの会後援会

銀行振替 第一勧業銀行池袋西口支店190-1434235

あぶらむの会後援会 代表世話人八代崇
事務局 〒182 東京都調布市染地3-1-373 西田方

TEL0424-82-2051

○4月16日現在の募金の申し込み者(順不同・敬称略4月16日以降の方は次号にて)
畑中真由美 熊崎厚・佐恵子 富永興之介 横谷七造・絢子 大家俊夫 日下初子 第38回立

教高校SPF実行委員会 久山庫平 河野裕道 村瀬信也 三浦牧子 黒井ミヤ 久保田純子
西川征士 中野良春・えり子 名取麻子 今井志づ 京野和子 猿田長春・潤子 檜枝光太郎
池田寿美子 古田昌人 松崎仁 中村ひろ子 今里伸 平岡真 筒井啓子 久保真理子
菊地栄三 鈴木正男 青木道一 小松英樹 佐藤泰夫 渡辺隆司 木島出 安達宏昭 石井秀夫
根岸秀行・亞麗朱 平野幸男 佃正晃 祈りの家教会 新田和子 二宮ノブ 柳川ハル
横山博行・京子 秋山巖 篠宮慶次 甲原一 矢澤信夫 谷昌二 神子沢新八郎 高橋康之
高橋幸子 鈴木康邦 立石信子 長間四郎 橋場文昭 高坂征男 荒木伸怡 池袋聖公会婦人会
杉本公孝 西川貞子 宮田陽子 阿部潮音 上田敏明 竹田純郎 山田益男 岡田裕子
林英夫 上林由利 澤木敬郎 野崎節子 佐藤泰子 山本淑子 R・A・メリット 小泉恵子
井上洋子 浅香良平 倉石昇 早瀬隆司・真知子 斎藤英樹 山口啓子 外村民彦 遠藤明子
萩谷長生・睦子 川上章子 高橋正子 藤田和久 橋本禮子 渡辺恒幸 荻野一郎 米田博行
斎藤道雄 須藤恵子 久保田彰 畑井正春 沼尾康彦 長山治之 大城恵子 佐々木昌子
西岡紀子 松原啓子 武井秀雄 安保謙 関田寛雄 等農光人 伴義裕 木村晃男 中島力
鍋木静 木村隆夫 玉塚和男 田島昌子 斎藤稔 楡原伸 市川聖マリア幼稚園 青柳真智子
横溝直樹 ディックミネ 荻野登・由香 佐藤六郎 玉谷隆次 櫻井和明 木村敦子 宮田昌彦・
美子 小間正夫・美代 小仲宏 室田直美 田中国臣 瀬堀信一 村守直芳・恵子
小笠原スワ 川上詩朗・美砂 糟谷珠子 村上達夫 大村重子 W・F・ハナマン 丹治正明
須藤秀夫 奥野万里子 佐藤良徳 谷合広彦 松戸集会伝道所 真辺真 大野里美 木村康一
中山暁雄 富山聖マリア教会 斉藤孝 安藤実・陽子 木俣宣道 平貴仁 米山寛 太田泰彦
佐藤裕 岩間光雄 井上雅由 小笠原政弘 鈴木昭正 豊田庫雄 竹内寛 二木敦子
小久保政市 安藤希代絵 宮島淑子 松田麻起子 倉敷英子 出口彰 戸田実 大久保俊一
五十嵐正人 平安女学院宗教部 鎌田玲子 大石正代 深井薫 佐口哲 中野光 中部教区伝道所
京都復活教会 大橋忠雄 西崎成樹 萱間隆夫 桂英隆 佐藤一宏 星野一朗 阿久津富男
深谷麻子 高瀬由香 松本尚夫・郁子 キープ協会 佐藤哲典 尾形典男 立教女学院
三原一男 伊藤友昭 相沢牧人 尾針明宏・恵子 鈴木啓 中村久良・美有紀 高木祥光
木田献一 松村行雄 高田建夫 西田邦昭 深野毅 高橋和子 矢部直美 吉村久美
平良精三 中村洋 森田万里子 浅井敬子 大橋寛 遠藤哲 大杉匡弘 前田敬 八代学院
湯浅貴子 知念ノブ 宮城タケ 知念ハル 徳田その 大城つる 神島洋二 形部賢
三原達也 高崎健一・由理